

令和5年度 学力向上重点指定校報告書 落合東小学校

1 学校の課題

【全国学力・学習状況調査（第6学年対象）】

| | 算数 | | | | | |
|----|-------|----|----|---------------|-----|------|
| | 平均正答率 | | | 正答率30%未満児童の割合 | | |
| | 国 | 市 | 本校 | 国 | 市 | 本校 |
| R4 | 63.2 | 65 | 56 | 8.9 | 6.5 | 16.5 |
| R5 | 62.5 | 64 | 54 | 9.8 | 8.5 | 18.2 |

【標準学力調査（3・4学年対象，5月実施）】

| | 算数 | | |
|----|-------|------|------------------|
| | 平均正答率 | | 正答率30%未満 の児童数 |
| | 国 | 本校 | 本校 |
| 3年 | 74.6 | 69.6 | 5人/58人中 |
| 4年 | 71.9 | 72.7 | 1人/60人中 |

本校は、全国学力・学習状況調査（第6学年）において、過去2年間、算数科の平均正答率は広島市の平均より10%近く低い数値となっている。正答率30%未満の児童の割合については、広島市の平均より10%近く多いことが分かる。今年度実施した標準学力調査（第3・4学年）においても、第3学年の平均正答率は、全国平均より5%低い数値となっており、正答率30%未満の児童がいることが分かる。

【全国学力・学習状況調査（第6学年）児童質問紙より】

| 質問項目 | 肯定的回答 | |
|-------------------------|-------|-------------|
| | 全国 | 本校（全国平均との差） |
| 友達関係に満足していますか。 | 90.4 | 90.3（-0.1） |
| 人が困っているときは、進んでたすけていますか。 | 91.8 | 91.6（-0.2） |
| 算数の勉強は大切だと思いますか。 | 94.2 | 98.6（+4.4） |
| 算数の勉強は好きですか。 | 61.4 | 56.2（-5.2） |
| 算数の授業の内容はよく分かりますか。 | 81.2 | 72.6（-8.6） |

また、全国学力・学習状況調査（第6学年）の児童質問紙調査にも表れているように、本校の児童は、友達と適切に関わり合いながら学習に取り組んでいる児童が多い。しかし、学習内容が定着しにくく、意欲が低い児童もいる。普段の課題やテストでも、すぐ諦め、空欄のまま提出したり、授業中は「分かった」「できた」とできた気になっていても、一人で宿題やテストをできなかつたりする児童も多くいる。

以上の実態から、算数科における本校の課題は、次の3点と捉えた。

- ①正答率30%未満の児童の割合が高く、基礎学力の定着が不十分である。
- ②学習内容が定着しにくいことから、意欲が低くなっている児童が多い。
- ③授業中にできていることが、テストや宿題等になるとできず、自信がもてない。

そこで、授業中の「分かった」「できた」で終わらせず、一人でも課題や宿題を「できる」という児童を育成したいと考えた。そのような児童を育成するためには、授業の目標を全員が達成でき、一人でも課題に取り組めるよう、児童の実態に応じた授業構成を考えていく必要があると考え、「かかわり合い」と「習熟学習」を大切にしていこうとした。

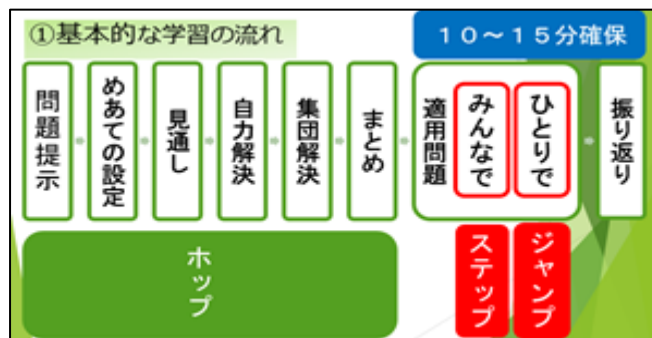
2 研究主題

みんなで「わかった！」一人で「できる！」子どもの育成～かかわり合いと習熟学習を通して～

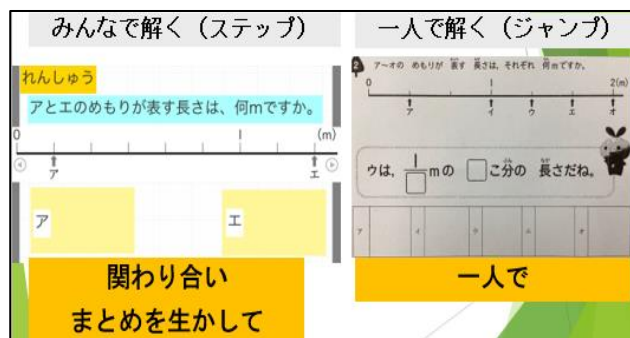
3 取組内容

1 授業改善

(資料①「基本的な学習の流れ」)



(資料②「適用問題」)

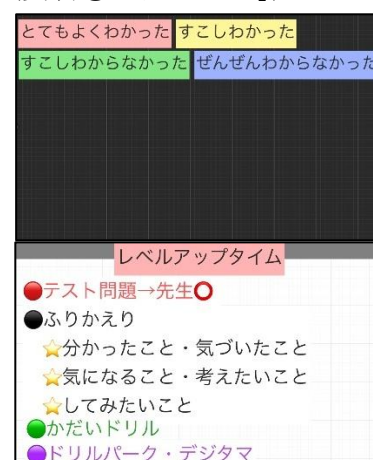


基本的な学習の流れをパターン化した。学力向上重点指定校として進めている授業モデルを基本とすることで、「かかわり合い」と「習熟学習」を両立し、みんなで「わかった!」一人で「できる!」子どもの育成につながると考えた。(資料①)

また、本校児童の実態を考慮し、適用問題をみんなで解く、一人で解くという2段階にした。まず、友達と関わり合いながら問題を解決することで、より多くの児童が自信をもち、一人でも安心して問題に取り組めるようにすることがねらいである。また、問題をどう読み、どう答えるかといったところでつまづく児童にとって確認の場が必要であると考えた。(資料②)

さらに、振り返りは、オクリンクでカードを作成し、提出するようにした。カードは、授業の理解度を4段階で選択し、「分かったこと」、「次にやってみたいこと」などを自由記述できるようにした。必要に応じて、児童の振り返りを共有し、本時のポイントを再確認したり、次時の見通しをもてるようにしたりした。(資料③)

(資料③「振り返り」)



2 習熟学習

(1) マストレタイム

四則計算の技能の向上、定着を目的として、全学年毎週金曜日の朝8時25分から10分間、「マストレタイム」という習熟の時間を設けた。最初の5分で計算プリントに取り組み、残りの5分間で答え合わせと記録をしている。プリントの表には基礎的な計算問題(第3~6学年は、主に九九)、裏には学年に応じた問題を用意した。1か月は同じ系統の問題をするようにしている。記録用紙には、答えを書いた数と、正解していた数を書くようにした。個々に応じて解くことができる問題数が違うため、できた問題を確実に正解することを大切に、児童のやる気につながるようにした。

(2) 計算検定

既習の計算をすべての児童に定着させ、計算がスムーズにできるようにすることをねらいとして、計算問題のテスト(10分間)を実施した。これまで、年1回(2月)行っていた取組を、今年度は年3回(7月・12月・2月)行った。2月の検定では、全問正解するまで、再テストを行い、合格した際には、検定認定証を渡すようにした。

(3) 放課後学習

放課後15分程度、算数の宿題に取り組む時間を確保した(3~6年)。希望する児童が、算数科の宿題の一部を行い、残りを「一人でできる」自信をつけて帰れるように設定した。直しや補充の必要な児童や家庭学習が定着していない児童については、教師からも声をかけ、指導を行った。



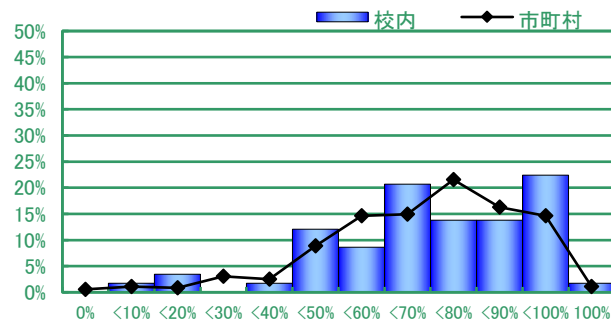
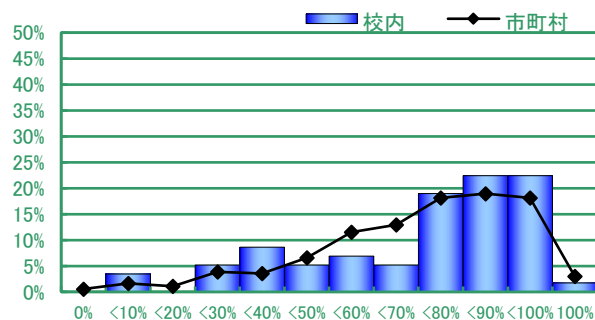
4 検証結果

1 標準学力調査（算数科）の結果から

【第3学年】

| 令和5年5月 | | | |
|------------------|----------|------------------|-------------|
| 平均正答率 (全国との差) | | 正答率30%未満 の児童数 | 評定1の 児童数 |
| 全国 | 本校 | 本校 | 本校 |
| 74.6 | 69.6(-5) | 5人/58人中 | 20 |

| 令和5年12月 | | | |
|------------------|------------|------------------|-------------|
| 平均正答率 (全国との差) | | 正答率30%未満 の児童数 | 評定1の 児童数 |
| 全国 | 本校 | 本校 | 本校 |
| 69.9 | 69.2(-0.7) | 3人/58人中 | 21 |



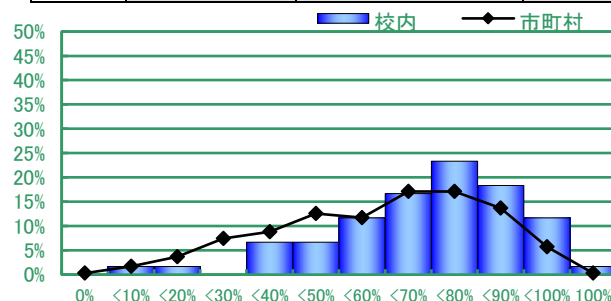
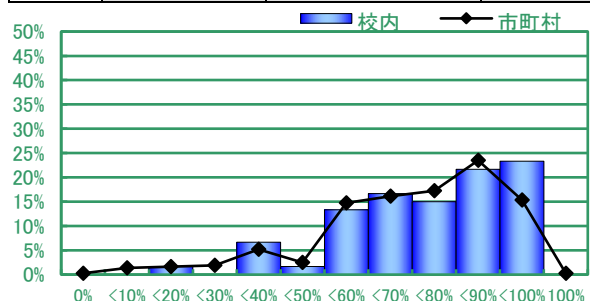
| 正答率30%未満の児童 | 正答率 (5月) | 正答率 (12月) |
|-------------|----------|------------------|
| A児 | 25 | 43.8 (5月から+18.8) |
| B児 | 6.3 | 40.6 (5月から+34.3) |
| C児 | 9.4 | 37.5 (5月から+28.1) |
| D児 | 21.9 | 15.6 (5月から-6.3) |
| E児 | 21.9 | 6.3 (5月から-15.6) |
| F児 | 37.5 | 18.8 (5月から-18.7) |

5月調査と12月調査を比較すると、本校の平均正答率は全国平均に近づき、正答率30%未満の児童数は5人から3人に減少した。さらに、全国平均値との差を個人別で比較すると、学年全体の60%の児童が良い方向に変化している。一方、評定1の児童数は20人から21人に増加した。正答率30%未満の児童は、5月調査における5人のうち2人が変わらず、1人が新たに加わった。

【第4学年】

| 令和5年5月 | | | |
|------------------|------------|------------------|-------------|
| 平均正答率 (全国との差) | | 正答率30%未満 の児童数 | 評定1の 児童数 |
| 全国 | 本校 | 本校 | 本校 |
| 71.9 | 72.7(+0.8) | 1人/60人中 | 22 |

| 令和5年12月 | | | |
|------------------|------------|------------------|-------------|
| 平均正答率 (全国との差) | | 正答率30%未満 の児童数 | 評定1の 児童数 |
| 全国 | 本校 | 本校 | 本校 |
| 64.8 | 68.3(+3.5) | 2人/60人中 | 17 |



| 正答率30%未満の児童 | 正答率 (5月) | 正答率 (12月) |
|-------------|----------|------------------|
| G児 | 15.6 | 38.7 (5月から+23.1) |
| H児 | 34.4 | 19.4 (5月から-15) |
| I児 | 31.3 | 9.7 (5月から-21.6) |

5月調査と12月調査を比較すると、本校の平均正答率は全国平均との差を広げ、評定1の児童数は、22人から17人に減少した。さらに、全国平均値との差を個人別で比較すると、学年全体の61%の児童が良い方向に変化している。一方、正答率30%未満の児童数は1人から2人に増加した。正答率30%未満の児童は、5月調査における1人は抜け、2人が新たに入った。

2 算数アンケートの結果から

【算数アンケートの結果 (第3・4学年)】

| 質問項目 | 肯定的回答 (%) | |
|------------------------------------|-----------|-----|
| | 5月 | 12月 |
| ①算数は「楽しい」と思いますか。 | 93 | 91 |
| ②友達と関わることで、「わかった」と感じることができましたか。 | 88 | 90 |
| ③一人で「できる。」「やってみよう。」と、感じることができましたか。 | 94 | 94 |

4月から、学力向上重点指定校の授業モデルを実施していたためか、「算数は楽しい」、「一人でできる。やってみよう。」と肯定的に回答している児童は9割を超えていた。「分かった」と肯定的に感じている児童は、12月調査において9割に達した。しかし、取組を続けてきた12月時点でも、「算数を楽しんでいる児童」が11人、「分かったと感じることができていない児童」が12人、「できる、やってみようと感じることができていない児童」が8人いた。

3 個別の児童の姿と結果について (第4学年)

【G児】

- 5月 (評定1) 15.6% (全国との差-56.3%) → 12月 (評定1) 38.7% (全国との差-26.1%)
正答率が30%を超え、全校平均との差が30.2%向上した。
- 自力解決場面において、最初に友達の考えやヒントを見てから考えていたが、まず自分で考える姿が多く見られるようになった。
- 振り返りを見ると、10月の概数の使い方と表し方の単元までは、「少し分かった」という理解度の選択のみにとどまっていたが、2月の小数のかけ算とわり算の単元では、「少し分かった」「かけ算の時と同じようにわり算も10倍してやると答えが出る。」とその日の学びを自分なりに言葉にすることができていた。

【J児】

- 5月 (評定1) 50.0% (全国との差-24.6%) → 12月 (評定2) 61.3% (全国との差-3.5%)
全国平均との差が18.4%向上し、評定が1から2に上がった。
- 毎日、自主的に放課後学習に取り組んだ。
- 休憩時間や放課後、自分から分からないことや不安な気持ちを教師に相談し、その日のうちに解決しようとする姿が見られた。
- 授業での自力解決場面や集団解決場面では、自分の考えをノートに書いたり、積極的に挙手をして発表したりする姿が多く見られた。また、自分と違う答えになっている友達のノートを見ると、自分の考えを修正したり、「なんで?」と考え直したりする姿も見られた。
- 振り返りを見ると、12月までは「ぜんぜん分からなかった」と否定的な理解度を選ぶことが多かったが、1月からは「とてもよく分かった」と肯定的な理解度を毎回選択している。

【K児】

- 5月 (評定3) 90.6% (全国との差+18.7%) → 12月 (評定3) 96.8% (全国との差+32.0%)
全国平均との差が13.3%向上した。
- 授業での自力解決場面や集団解決場面において、自分の考えを自分の言葉で積極的に伝えていた。また、友達の考えを見たり聞いたりする中で自分の考えを修正していた。
- 振り返りを見ると、7月の小数のしくみの単元では、「小数を10倍すると、位が左に1桁上がり、10分の1すると位が右に1桁下がるのが整数と似ている。」と分かったことを自分なりに書いていた。2月の小数のかけ算とわり算の単元では、「かけられる数が大きくなっても、計算の仕方は変わらないことが分かったので、もっと大きくなってもできる気がします。」と発展的な問題に対する意欲を示す言葉が書かれていた。

5 研究成果

【算数科における本校の課題】

- ①正答率30%未満の児童の割合が高く、基礎学力の定着が不十分である。
- ②学習内容が定着しにくいことから、意欲が低くなっている児童が多い。
- ③授業中にできていることが、テストや宿題等になるとできず、自信がもてない。

課題として挙げた上記3点は、標準学力調査（第3・4学年）と算数アンケートの結果、児童の姿から、今年度の取組により、改善傾向にあると考える。今年度の取組ごとに、児童の姿からその成果を振り返る。

1 授業改善について

学力向上重点指定校の授業モデルをもとに授業を構成し、「かかわり合い」や「習熟学習」の時間を多く設定し、適用問題を「みんなで解く」「ひとりで解く」と段階を踏んで出題したことが、標準学力調査の全国平均との差の比較における改善につながったと考える。

自力解決場面において、オクリンクのヒントカードや友達の考えを知ることができることで、あきらめることなく課題と向き合う児童の姿が多く見られた。また、考えを交流しながら、考えを修正したり、理解を深めたりすることができた。

集団解決場面においては、「なんで?」「どうやったの?」といった発問を意図的に取り入れたことで、単なる数の操作だけでなく、数学的な見方や考え方に目を向ける児童が増えた。

習熟学習の場面においては、習熟の時間を確保することで、他の問題にも適用できるか、「ひとりでできる」かを試す経験を積むことができた。また、適用問題をみんなで解く、一人で解くという2段階にしたことで、自信をもち、一人でも安心して問題に取り組めた。問題をどう読み、どう答えるかといったところでつまずく児童にとっての確認の場にもなった。問題を解いていくうちに「そういうことか。」と理解につながっていく児童も多かった。支援や指導が個別に必要な児童に対応することができ、つまずきを改善することにつながった。

振り返り場面では、オクリンクを使ったことで、児童一人一人が授業の目標を達成できているか理解度を毎回把握することができた。そのため、教師自身が授業を振り返り、授業づくりを工夫したり個別の支援や指導を行ったりすることができた。また、授業中に「みんなで分かった」ことや気づいたことを、児童一人一人が改めて文章にすることで理解を深め、「一人でもできる」「できそう」という自信や意欲につながったのではないかと考える。

今後は、知識・技能中心の授業、思考・判断・表現中心の授業の構成をそれぞれ再考し、習熟の時間を確保して、基礎学力の確実な定着を目指したい。

2 習熟学習（マストレタイム・計算検定・放課後学習について）

標準学力調査の観点別正答率の「知識・技能」をみると、第3学年は5月73.7%（全国比-4.5）12月74.5%（全国比-0.9）、第4学年は5月77.4%（全国比+0.9）12月74.4%（全国比+4.1%）となっており、習熟学習の成果が表れている。

マストレタイムは、週1回の取組であったが、基礎的な四則計算の技能の向上、定着につながっていると考えている。表は基礎的な計算問題、裏は学年に応じた内容としたことで、当該学年で学習していることを練習しつつ、前学年までの忘れてしまった学習（今年度は主に九九）を思い出す良い機会となった。

計算検定は、年1回から年3回に増やしたことで、計算力をつけていこうとする意識を継続することができた。また、定期的な実態把握の機会となり、授業づくりや個別の支援・指導につながった。

放課後学習は、宿題をすることが難しい児童や不安な児童にとって有効な場になった。毎日、自主的に取り組む児童も各クラスにおり、困ったときに教師や友達に相談することができ、「一人でできそう」と自信をもって下校することにつながった。また、教師から声掛けをすることにより、強制的ではないものの、つまずきの取りこぼしを止めることができた。

今後も、3つの取組を継続し、授業で学んだこと・前学年で学んできたことを確実に定着することを目指したい。また、授業のまとめ・みんなで解く問題・一人で解く問題・宿題（テスト）という流れの中で児童のつまずきを取りこぼさないようにしていきたい。